

1. 横浜国大グリークラブ定期演奏会を聞いて

平成 22 年 1 月 9 日(土)18:00 神奈川県立音楽堂。出演者 T1:10 名、T2:13 名、B1:13 名、Bass:13 名(人数は名簿による)。指揮者:飛永悠佑輝、ピアノ伴奏:佐藤美保子。

演奏曲目:ステージ1:悔悟節のための4つの歌(Javier Busto 作曲)、ステージ2:男声合唱組曲「吹雪の街を」(多田武彦作曲)、ステージ3:「Sea Shanty」より(6曲)、ステージ4:男声合唱とピアノのための「祈りの虹」(新実徳英作曲)、そして、アンコール2曲。

感想:全体として若さがあふれていていかにも学生の合唱団らしい演奏でした。また、私にはきわめて難しいと思われる宗教曲をやすやすと歌っているように見えるのは、指導者もさることながら団員の熱意が伺われました。(因みに常任指揮者は国大工学部出身の合唱団 OB で桐朋学園の指揮科へ入り指揮、音楽理論、ヴァイオリン、等をプロについて学び各地の合唱団やオケを指導している)

「若さ」についてはやはり *ff* のヴォリュームが圧倒的で *pp* の繊細さとマッチして結構劇的な効果を出していたように思いました。

St1.「悔悟節のための～」は今まで聴いたことも無くむづかしくてよくわかりませんでした。

St2.組曲「吹雪の街を」6曲(作詞:伊藤整)よく揃っていて歌詞がはっきりわかりハーモニーもよくよい演奏でした。

St3.お目当ての「Sea Shanty」6曲は、学生団員の指揮で Spanish Ladies What shall we do with the drunken sailor、Bound for the Rio Grande、Blow the man down、Swanseatown、High barbary で、～は口パートショウの編曲で市販されている CD に収録されているものと同じです。は Arther E.Hall 編曲となっていました但我々が歌っている曲とはまるで違った曲のようでした。

全体にテンポが速く歯切れ良く軽快に歌われていました。やはりハーモニーを重視した正統派コーラスという感じで、海の男の荒々しさというものは出されていませんでした。ではソリストがちょっと緊張してあがっていたのが音程を外しつつられてコーラスも音がずれていましたが途中で修正されました。ソリストが2人出ましたが最後に二人で殴り合いをして両者共にダウンするというパフォーマンスがあり満場爆笑。

では歌いながら胸ポケットに入れた色とりどりのチーフを投げ上げるパフォーマンスがあり華やかな感じでした。このステージの服装は黒ズボン、開襟シャツの襟にバンダナを巻くというもので水夫らしくしたということでした。(その他の

ステージは白ジャケットに黒ズボン、黒蝶ネクタイ)なお、最初に学生の団長が出て「Sea Shantyとは」という解説をしましたが、「諸説ありますが」「海の小屋という意味」だと言っていました。(確かに辞書を引くと「小屋」という訳があります。)

St4.「祈りの虹」この曲はピアニストが大活躍。4つの組曲で原爆に遭った広島島の惨状を現し平和への祈りをこめたものということでしたがヴォカリーズをはさみ激しい変化と静寂を表現し整然としたなかなか立派な演奏とと思いました。

アンコール2曲を含め2時間15分は大変聴き応えのある演奏会でした。つくづく「若さ」とは良いものだと思います。(なお聴衆の入りは80%くらい)

私たちにもかつてあのような若さを誇った時代があったのかなア。(T1:中野さんの報告)

2. 幻の登山部ツアー

四国石鎚への登山部ツアーは2009年8月に予告されましたが、企画が壮大すぎたため延期。しかし下見に行った本間部長より寄稿がありました。

10月11日(日)早朝4時に出発して、米子より大山麓の宿坊・山楽荘午後4時着。翌日、大山登山に始まり、三朝温泉・輪光院泊～三徳山登山～瀬戸大橋～徳島道～車中泊～剣山登山～石畳の家泊～宇和島・泉谷棚田～遊子段々畑～西条市内のスーパーで買い物・ここで神輿に出会う。～石鎚ふれあいの里泊～石鎚山登山～16日午後5時より7時まで西条祭りを河原で見物～午後7時帰途、翌日午前10時半帰宅、総走行距離2,550キロの旅を無事終えました。石鎚ふれあいの里はとても素晴らしいところで、家内も山路さんの御蔭と喜んでます。山はいずれも快晴に恵まれ、宿も宿坊に泊まったりしました。(本間さん記)

3. こんぴらふねふね

正月に帰省した折、金比羅さんに寄った。785段を登って本宮を参拝した。絵馬殿(絵馬堂)にはたくさんの絵馬に加え、奉納記念の額(これも絵馬と呼ぶのかも?)が多く飾ってあった。多くは貨物船や漁船だが、海王丸もあった。さすが船の神様。ただし日本丸の額は見あたらず。残念。

それから参道下の海の科学館へ。いろんな模型や解説があったが、白瀬中尉の南極探検出発から今年で100年だそうで、その「開南丸」が帆船だったと知り、無知を恥じる。(山路)

